

夏祭りが教えてくれたこと

大志

私が小学校5年生だった頃の話です。

夏祭りの日、友人と待ち合わせをしていました。いつも10分くらい平気で遅れてくる友人が珍しく時間通りにやって来ました。その友人は、「早く行くぞ!」と、すでにエンジン全開。かくいう私も興奮しており、二人でダッシュして祭り会場へ向かいました。

祭り会場には、すでに多くの子供達がいきました。ふと見ると、自分たちと同年代の子供たちが真剣に風船釣りに挑んでいます。「俺らも並ぶぞ!」と相変わらずテンション高めの友人に引っ張られて参戦。その後も、夢中で会場を駆け回りました。

しばらくすると、お腹が空いてきました。友人と二人、顔を見合わせて途方に暮れました。二人のポケットに入っていたはずの硬貨は「スーパーボール」に変わってしまっていました。

その時でした。

「おう!楽しんでるか!」

声の主は友人の父親でした。友人の父親は、私と友人が所属する少年野球の鬼コーチで、少し近寄りたがい存在でした。しかしこの日は、私と友人の寂しい懐事情を聞くと、「ついて来い!」と私と友人を祭り会場の外れにある中華料理屋に連れて行ってくれました。友人の父親は、ビールジョッキを傾けつつ、祭りの夜の開放感に浸っているようでした。その表情は、少し子供のように見えました。

帰宅途中、祭り会場を通ると、既に提灯の灯は消えており、祭り客はほとんど残っていませんでした。私と友人がこの日唯一の戦利品を得たスーパーボール屋台もすでに片づけられていました。私は、暗く閑散とした会場を通り抜けながら、何だか少し切ない気持ちになりました。

大人の中にも「子供」が潜んでいるということ。楽しい時間の後には一抹のもの悲しさが残るということ。今思うと、そんな人間の妙味を知った「夏祭り」でした。

私の夏祭りと思い出

工藤 莞司



故郷東根の七夕祭りはローカル色豊かなものだが、伝統のある夏祭りだ。8月のある夜、鼓笛隊を先頭に七夕飾りの笹竹や田

楽提灯を持った子供達が行列を作り本町の大通りを練り歩く(写真は昨年の市報より転載)。各町内・部落毎に準備して、約20もの小中校生の集団が七夕飾りや提灯の絵を競う祭りである。豊年満作を願ったもので、江戸後期に始まったという。ユニークなのは全て子供達で企画し準備して実行する点で、最年長の中学3年生が仕切った。約半世紀も前だが、私も経験した。中3の夏が近づけば順番で、町内に作業小屋を借りて準備に入る。毎晩詰めて、田楽提灯の作成、紙貼り、絵描き、そして笹竹の購入や短冊作りの他、鼓笛隊の編成、練習もある。大きな出し物宝船等には当時はリヤカー(後には軽トラ)の手配も必要であった。経費は町内各戸に寄付をお願いして回った。

私の属した町会は小さく、それでも40位の田楽提灯や笹竹の七夕飾り、宝船を用意して、子供達に持ったり、引いたりして貰った。祭り当夜までに準備を整え、近郷近在から集まった大勢の見物客の前を練り歩き、夜遅く40人以上の子供達を率いて無事我が町内へ戻った時は、安堵感や充実感を覚えたことが微かな記憶に残っている。

かくして、中学3年生はリーダーとして学校や家庭では経験できない様々な事柄、各材料等の購入からそれらの収支迄を経験して巣立つことになり、一つの社会勉強であったことは間違いない。

時は流れて、現在も七夕祭りは続いてはいるが、市が保存会を立ち上げて、大人達が関与せざるを得ないと聞く。受験や習い事、最近では少子化が拍車を駆けているようだ。夏休み帰省の折り小学生であった私の子供も従姉妹達と一緒に参加したことがあったが、最近では遠ざかってしまった。久しぶりに今年あたり見物したいと思う。

【夏祭り】

夏祭り

大友

満開に咲く花火に屋台の活気、鮮やかな浴衣。日本の夏祭りといえどとにかく賑やかです。夏になれば全国各地で様々な夏祭りが催され、そのために他県などに訪れる人もいます。

しかし、全国区ではなくとも、多くの人を知っていません。私の中で鉄板といえる夏祭りがあります。それは地元で毎年6月に行われる「蛍祭り」です。

駅の近くに流れる玉川上水は、木や草が鬱蒼としていて、そこだけ森です。その川沿いに、人工飼育で育てた数え切れない蛍を放流し、その蛍が放つ数多の光を鑑賞する、という祭りです。都内ではなかなか見られぬ蛍を、杉並区の小さな町で見ることができるのです。

毎年その祭りの開催時期だけは、これでもかというくらいに地元で人が溢れます。私のように犬の散歩がてらプラプラ見に行く地元民もいれば、電車を乗り継いでくる人も最近は多いとか。今年はFacebookで宣伝したところ、その書き込みを見た多くの友人らが「ほたる祭り」を訪れ、彼らの嬉しい感想を耳にすることができました。

小さな駅ですし地元の商店街が主催なので、決して凝った演出などありませんし、際立ったものがある駅ではありませんが、そんな町でだからこそ引き立たせるごんまりとして温かく、そして人々のはしゃぐ声が木霊す様子は町全体が笑っているようです。日頃のごんまりした雰囲気、そんなときでもどこか脱せないような街並みに愛おしさを感じます。これが地元愛というものなのでしょう。

『夏びあ』に載るような大きな夏祭りも賑やかですが、私にとって夏祭りといふとこの地元の蛍祭りを思い浮かべます。あのぼわんと柔らかい光は、到底小さな虫が発するものとは思えぬほど、美しく初夏の夜を彩ります。そして川沿いに集まる人々は逸る心を抑えるように、静けさを好む蛍のために声を潜めながら、感嘆の声を上げるのです。小さな町に起きる幻想的な夏の夜。よかったらお越し下さい。

ボストンの7月4日

A.T.

「夏祭り」と聞いて真っ先に浮かぶのは、アメリカに在住していた高校時代、旅行で訪れたマサチューセッツ州・ボストンで観た花火です。

7月4日のアメリカの独立記念日には、全米各地で様々な催物が盛大に行われます。中でも毎年ボストンで行われるこの花火大会は、ニューヨークで行われるものに次いで2番目に大きい催物と言われています。私が訪れた時にも、アメリカ西海岸やメキシコ、中にはヨーロッパからはるばる観光に訪れてきた方に出会ったほどです。

アメリカは強い愛国心を持った方が多く、その上独立記念日ということで、国旗が大きくプリントされたTシャツを着たり、国旗のフェイスペイントをしたり、自由の女神の格好をした人がいたり、皆思い思いの格好でその日を祝います。

夜7時になると、バンドの生演奏が響き渡り、同時にチャールズ川という有名な大きな川沿いに花火が打ちあがります。生演奏と花火のコラボレーション・・・日本では中々ないですね。この頃には皆のテンションもMAXで、大いに盛り上がります。

会場全員で、生演奏にのせてアメリカ国歌や伝統的な歌を大合唱し、最後に花火が再び盛り上がり幕を閉じます。会場全員が一体になって歌いながら綺麗な花火を観るといふのは、言い表せない感動がありました。

日本では体験できないスケールの大きなお祭り。もし独立記念日にアメリカを訪れる機会がありましたら、是非各地のお祭りを覗いてみてはいかがでしょうか。

